

広岡さんが忽然として他界された。茫然となる。心から湧く深刻な寂寞感はいち切れない。

広岡さんには大河内山荘で大会のあった春五十二年振りに再会した。下関でお別れして以来のことである。大戦後の著しい世相の遷は、吾々の境遇を徹底的に変え



度出席してはどうかと、何回か誘って、やっと東京例会に現われた。出席した途端、急激に昔懐かしさが蘇ったばかりでなく、その後の会

広岡さんは友情に厚かった。そして何時も簡単なハガキの消息を交換するのを絶やさない、筆まめであった。そして其の通信文は甚

「甚」である。全国大会へ西下するの先「甚」が目的の大半ではなかつたか。前夜より関西のメンバーを集めて徹夜の楽しみであ

自分は宇治川にあった本店の外電部に勤め初めて以来の交誼である。その後、時と処とを異にし、

東西に別れた。仕事も変り住所も遠くなったが、その健在を確め合い、文通をし、電話を交し、再び

昨年、木畑君が重病で入院してからは、真から心配し、常にその容態を問ひ合せて来てその都度こ

最も親しい友人の二人を予期せずも忽ちのうちに失って、何とも

広岡さんのあの、どうかと思われほど、静かに話しかけて来る



山岡弥之助翁(宏堂)

神戶近代史の主役たち―第一部 断片的に顔とイメージが浮びます、が人と人がどう結びついて、町をつくり、港や産業が育ったか

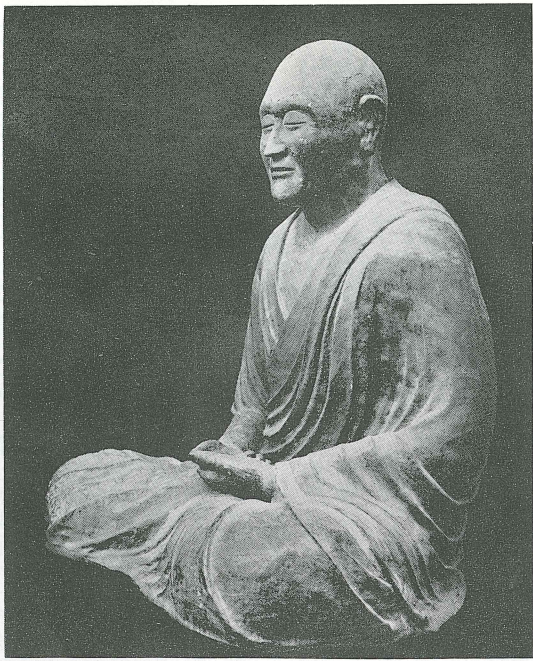
神戶新聞「海鳴りやまず」の出版

「神戶経済一世紀の通史を作ろう」そんな発想から本書は生れました。来年(五十二年)は神戶商

人々、羊毛の兼松房次郎、鐘紡と武藤山治、鈴木商店と金子直吉、松方幸次郎と川崎造船、神戸高商

巴里展に於ける鑑真和上に就いて

柳田義一



嘗て松尾芭蕉が奈良の唐招提寺を訪れ盲目の鑑真和上の座像の前に立った時の感動は

の名句につきては、先般四十九日に亘ってパリの美術館で開かれた「鑑真展」はいと静かなブ

パリ通信によると閉会後も話題を呼び起している。シャンゼリゼに今をさかりと咲き乱れるマロ

二エの花に、盲目の心眼を開いて微笑をたたえているにちがいないと彼の花の都の芸術界でこれだけ

唐招提寺山内の森本さん、一条院さん達の喜びのほどが推察でき

芸術の都と虽も率直にいうと、東洋的な内面の美にはあまり関心が無いにもかかわらず大統領夫人

無論、数としては少ない。鑑真和上が文化交流の為の空路渡仏したその動機は、フランスの代表的

和上は道を伝えるために、いく度か遭難しながら渡海した。上陸したときには、十余年の過労の為

の秘めた考証である。作風は写実そのもので、千三百年をへだてて今「尚在ますがごとく」

然一体となり、メディアーションを余儀なくされたものであろう。こうなる文化交流の真意は、量

深く深く故人の冥福をお祈りします。(五十二年一月) 写真は東京辰巳会での広岡氏